

2019年(令和元年)11月1日 関西音楽新聞(Classic Note)

# 絶妙な間の取り方 笑いで客席を包み込む

第28回みつなかオペラ

チマローザ「秘密の結婚」

## オペラ評

見事に笑いで客席を包み込み、喜劇を喜劇たらしめた第28回みつなかオペラ「秘密の結婚」。公演はダブルキャストによる2日間。筆者は2日目の公演を鑑賞した。

地方で制作されるオペラシリーズとして平成3年に発足。地域に着実に定着をしつつ、妥協しない上質な作品作りが評価され、数々の賞を受賞して県内外で存在感を示してきた。これまで錚々

たるオペラの名作の上演が続いたところでチマローザの「秘密の結婚」上演とのこと、いささか驚いた。がみつなかオペラらしい瞬発力で物語の核なる魅力を引き出し、さらに本来はない合唱のパートをオリジナルで付け加えたことも功を奏し、作品自体が持つ力以上の躍動感でひとときも目が離せない舞台となった。



写真上下 撮影：仲野達也 提供：みつなかオペラ実行委員会

ある事を忘れるような歌手達の丁々発止の絶妙な間の取り方と、それに追随する日本語字幕の言葉選びの巧みさの両輪がうまく廻ったことだろう。特に際立ったのは、見栄からくる向上心と我が強さがある姉エリゼッタ

を、並河寿美が愛らしいコメディエンヌっぷりを発揮しての好演。一方、若さ故に直情的で空回りする妹カローリーナを坂口裕子が瑞々しさいっぱいに演じ、愛する人の前では一転して柔らかな表情になる可憐さも細やかに

表現して魅せた。この2人が、声色だけで性格や結婚に対する価値観が相反していることを明確にできる力量があるからこそ生きた演出が随所に散見された。

背後にゆらゆらりと忍び動くシルエットが心理的な駆け引きの緊張感を演出し、物語の緩急に役かった。実力派揃いの歌手達を余すところなく輝かせた井原広樹の演出、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団を指揮する牧村邦彦の牽引力が光る舞台だった。(10月6日、みつなかホール)

(吉村麻希)

